

大学周辺における学生の居住と利用に関する研究

日宇 泰之

1. 序論

1.1 研究の背景

近年、少子化に伴う青年層人口の減少によって、大学は入学志願者の減少という大きな問題に直面している。これに対応するため、多様なカリキュラムの創出などの工夫をしているが、受験生は将来生活の主体となる大学周辺の環境も志願校選定の際の重要な基準としていることや、大学における活動の拡大には大学周辺地域との連携が必要となることから、大学周辺地域の環境の向上が大学の魅力にもつながると思われる。

1.2 研究の目的

本研究は、大学の魅力の向上や大学における活動を支援するキャンパス周辺地域において、大学の魅力につながる良好な環境を創り出すために必要な事象を導き出すことを目的とする。

1.3 研究の概要

まず、九州大学を対象として学生の居住地の調査を行い、学生の居住地について現状の把握を行った後、箱崎キャンパス、六本松キャンパス周辺における居住の傾向と学生の属性との関係についての分析を行う。

次に、学生に対するアンケート調査を行い、学生の居住地の選択とキャンパス周辺の都市施設の利用について把握する。

最後に、学生居住数の多い街区について、街区の情報から類型化を行い、学生居住の多い街区の特徴を把握する。

2. 学生の居住地の現状把握と分析

2.1 調査の方法

調査は九州大学・大学院の各学部の事務局で管理している学生カードから、各学生の学部・学科・入学年

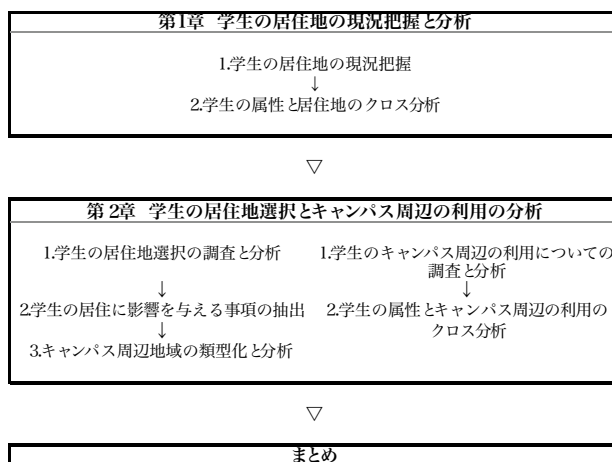


図1 研究のフロー

度・性別・現住所・自宅か否かの各項目を調査シートに記入する方法で行った。

調査を行った項目は、学生の入学年度・所属学科・性別・住所・自宅か否かの5項目である。住所については学生のプライバシーの保護などから街区符号(～丁目～番)までを調査した。自宅か否かについては、学生カードに記入されている保証人(親権者の場合が多いので)の住所と学生の住所が異なっているかどうかにより判断した。

2.2 調査で得られたデータの概要

調査の結果得られた学生数は12,592人(男子学生9,541人、女子学生3,051人)であり九州大学の発表する5月1日時点の調査対象部局の全学生数13,999人の90%について把握したこととなる(表1)。

2.3 学生の居住地についての分析

自宅から通学している学生は3,809人、そうでない学生は8,783人であった。男子学生と比べると女子学生のほうが自宅から通学している割合が高く(表2)、

表1 居住地調査で得られた学生数

学部	所属	文学部	教育学部	法学部	経済学部	理学部	工学部	農学部	医学部	歯学部	薬学部	21世紀プログラム	計
	男子学生		203	77	284	805	1093	3283	431	79	33	46	4
女子学生		349	147	211	302	265	359	412	19	21	38	15	2138
合計		552	224	496	1108	1358	3642	843	98	54	84	19	8476
修士課程	所属	人文科学府	比較社会文化学府	人間環境学府	法学府	経済学府	理学府	数理学府	工学府	システム情報科学	生物資源環境科学		計
	男子学生	51	66	121	87	103	287	80	722	309	276		2102
	女子学生	57	80	107	60	16	74	12	43	13	161		623
合計		108	146	228	147	119	361	93	765	322	438		2725
期(博士課程)	所属	人文科学府	比較社会文化学府	人間環境学府	法学府	経済学府	理学府	数理学府	工学府	システム情報科学	生物資源環境科学		計
	男子学生	15	97	119	46	59	172	42	262	123	166		1101
	女子学生	17	93	59	19	12	29	7	18	6	30		290
合計		32	190	178	65	71	201	49	280	129	196		1391

課程が進むにつれて自宅から通学する割合が減少していた(表3)。

キャンパスから2km以内に含まれる小学校区を対象として町丁目ごとに学生居住数を算出し、学生の属性データとのクロス分析を行った。学生の所属と居住地の関係をみると、面積の広い箱崎キャンパスでは学生の所属によって居住地の傾向が変化していたが、面積の狭い六本松キャンパスでは所属による居住地の傾向に差はなかった。これは主に活動する建物の場所が居住地の決定に大きく影響したためと思われる(図2)。

キャンパスの境界から100mごとに線を引き、その中に重心が含まれる街区の学生居住数を集計したところ、2つのキャンパス両方でキャンパスの境界から100m~200mの範囲で居住数が最も多く、女子学生は100~200mをピークに徐々に減少していたが、男子学生は100~200mより遠い距離帯にも学生数の多いものが存在するという傾向が現れていた(図3、4)。

3. 学生とキャンパス周辺地域の関係について

3.1 調査の方法

学生が居住地を決定する要因の把握と、学生のキャンパス周辺施設の利用について把握することを目的としてアンケート調査を行った。調査は学生数の多い箱崎キャンパスを対象に行った。このとき、九州大学のカリキュラムを考慮して、六本松キャンパス周辺、箱

表2 自宅か否かと性別の関係

	自宅	非自宅	合計	自宅	非自宅	合計
男子学生	2671	6870	9541	28.0%	72.0%	100.0%
女子学生	1138	1913	3051	37.3%	62.7%	100.0%
全体	3809	8783	12592	30.2%	69.8%	100%

表3 課程と自宅か否かの関係

	自宅	非自宅	合計	自宅	非自宅	合計
学部	2703	5775	8478	31.9%	68.1%	100.0%
修士	765	1958	2723	28.1%	71.9%	100.0%
博士	341	1050	1391	24.5%	75.5%	100.0%
全体	3809	8783	12592	30.2%	69.8%	100.0%

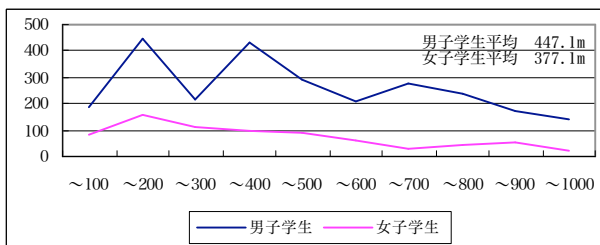


図3 箱崎キャンパスからの距離と学生居住数

崎キャンパス周辺どちらにも居住している可能性のある2年生は調査対象とせず、3年生以上の学生を対象とし、143人の回答を得た(表4)。アンケート調査は以下の9つの質問事項を用いて行った。

- (1) 住所(居住地調査と同じく街区符号まで)
- (2) 住居のタイプ
- (3) 住居についている設備
- (4) 住居を選ぶ際考慮した条件
- (5) 家を出る時間と帰宅時間について
- (6) 近所の人との関わり
- (7) 現在しているアルバイトとその場所
- (8) 都市施設の利用頻度と移動手段(コンビニエンスストア、スーパーマーケット、飲食店、居酒屋)
- (9) 通学の手段と所要時間

3.2 学生の居住地選択の方法

住居選択の条件として、最も回答数の多かったものは「部屋代」で「部屋の広さ」「通学の便」がそれに続いた。「周囲の環境」は全体を合計したものでは低い割合であるが、女子学生のみでみると、最も重視した条件という回答が多くなっている(表5)。周囲の環境の具体的な内容としては、男性はコンビニエンスストア、スーパーなどの生活利便施設までの距離を重視しているのに対し、女性は「駅・バス停までの距離」、「治安」を重視していた。

こうした男女の居住地選択の条件の違いを顕著に示

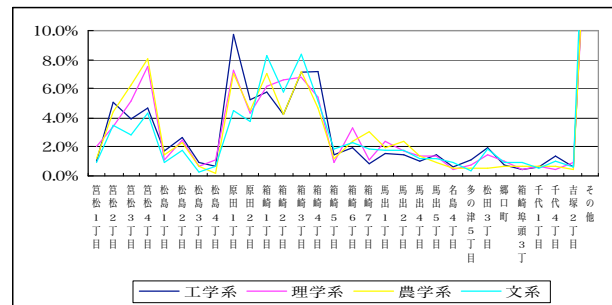


図2 箱崎キャンパス周辺における各所属の学生居住数

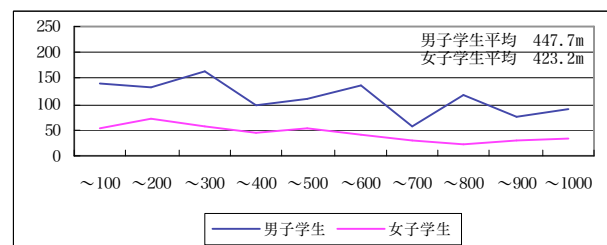


図4 六本松キャンパスからの距離と学生居住数

表4 アンケート調査における回答者の内訳

	学部生			修士課程			博士(後期)課程				研究生	合計
	3年	4年	計	1年	2年	計	1年	2年	3年	計		
自宅学生	11(4)	11(3)	22(7)	4(2)	5(1)	9(3)	0	0	0	0	1(0)	32(10)
非自宅学生	39(5)	24(10)	63(15)	25(3)	17(1)	42(4)	2(0)	1(1)	2(1)	5(2)	1(0)	111(21)
計	50(9)	35(13)	85(22)	29(5)	22(2)	51(7)	2(0)	1(1)	2(1)	5(2)	2(0)	143(31)

() 内の数字は女子学生数

表5 学生の居住地選定の条件と重視した順序

	部屋代		部屋の設備		通学の便		部屋の広さ		周囲の環境		その他		回答無し	
	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生	男子学生	女子学生
最も重視した条件	41.1%	28.6%	12.2%	14.3%	18.9%	9.5%	18.9%	9.5%	6.7%	38.1%	1.1%	0.0%	1.1%	0.0%
2番目に重視した条件	22.2%	14.3%	15.6%	14.3%	13.3%	23.8%	31.1%	33.3%	11.1%	9.5%	0.0%	4.8%	6.7%	0.0%
3番目に重視した条件	22.2%	19.0%	20.0%	19.0%	24.4%	38.1%	16.7%	14.3%	8.9%	4.8%	0.0%	0.0%	7.8%	4.8%
4番目に重視した条件	6.7%	28.6%	23.3%	4.8%	17.8%	4.8%	13.3%	23.8%	25.6%	23.8%	1.1%	4.8%	12.2%	9.5%
合計	23.1%	22.6%	17.8%	13.1%	18.6%	19.0%	20.0%	20.2%	13.1%	19.0%	0.6%	2.4%	6.9%	3.6%

す例として、街区の駅からの距離による男女の割合の変化を示す(図5)。

3.3 学生のキャンパス周辺地域との関わり

学生の登校時刻は大部分の学生が12時までであり、半数以上の学生が17時から23時の間に帰宅しているが、修士課程の学生には23時以降という回答も20%ほどあった(図6)。昼間はほとんど学校にいるためか、近所の人とのかかわりには約65%の学生が「全くかかわりがない」と回答した。

学生のキャンパス周辺施設の利用では、コンビニエンスストアが45%の学生がほぼ毎日利用していると回答し、90%以上の学生が週に1回以上利用していると回答した。さらに帰宅時間が遅くなることの多い、修士課程の学生に「ほとんど毎日利用する」の比率が高くなっていった(図8)。このため、学生の帰宅時刻とコンビニエンスストアの利用頻度の関係を調べてみると、21時以降に帰宅する学生の半数以上がコンビニエンスストアをほぼ毎日利用していた。また、飲食店も学生の帰宅時刻が遅くなるにつれて利用の頻度が高くなっており、23時以降に帰宅する学生の約60%が

ほぼ毎日利用していた(図8、9)。

4. 学生が多く居住する街区の特徴

4.1 分析の方法

学生居住数の多い街区の特徴を把握するため、学生居住数が10人以上の街区を対象として、街区の利便性や建物の種類などをカテゴリー化し、数量化Ⅲ類分析を行い、その後数量化Ⅲ類分析によって得られたサンプルスコアをもとにクラスター分析を行って、学生居住数の多い街区を類型化する。学生居住数が10人以上の街区は調査によって学生の居住がみられた街区の総数に占める割合が18%であり、大学キャンパス周辺の街区における全学生居住数に対する割合は約65%であった。

分析に用いた項目は1. 駅からの距離、2. キャンパスの境界からの距離、3. 商業施設数、4. 住宅数、5. 2階建て以下共同住宅数、6. 3～5階建て共同住宅数、7. 6階建て以上共同住宅数の7変数40カテゴリーである。学生は主に共同住宅に居住していると考えられることから、共同住宅は低層共同住宅、中層共同住宅、高層共同住宅の3つに分割した。低層共同住宅は木造で、設備もあまりよくないと思われるもの、高層共同住宅は鉄骨造では、エレベーターが設置されておりその他の設備もよいと思われるもの、中層共同住宅はどちらにも当てはまらない中程度のものである(表6)。

4.2 数量化Ⅲ類分析の適用

街区のもつデータを変数とした40カテゴリーについて数量化Ⅲ類分析を行った。その結果、固有値の大きいものから0.3344、0.2601、0.2487という数値が得られたため、固有値の高い順にⅠ軸、Ⅱ軸及びⅢ軸

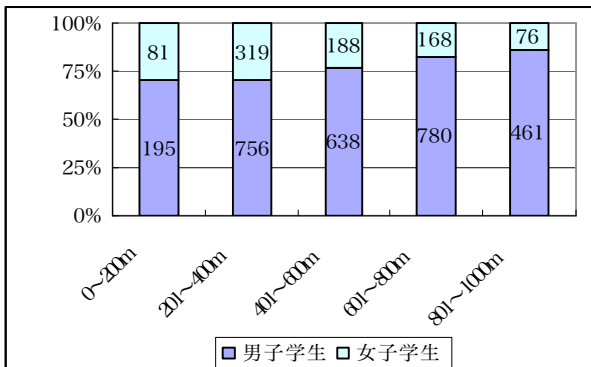


図5 駅からの距離と街区の男女割合

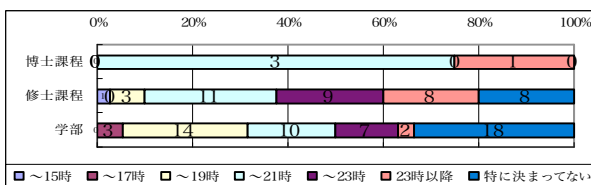


図6 学生の所属する課程と帰宅時刻

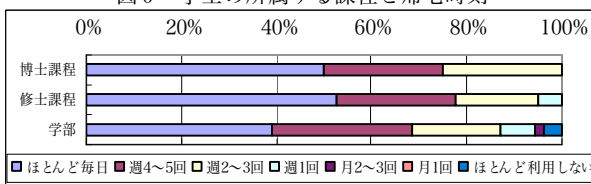


図7 学生のコンビニエンスストアの利用頻度

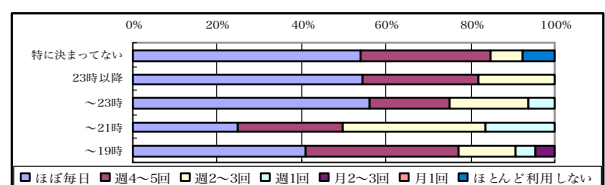


図8 学生の帰宅時刻とコンビニエンスストアの利用頻度

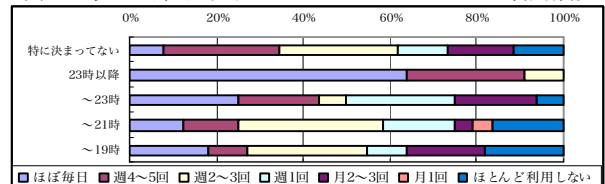


図9 学生の帰宅時刻と飲食店の利用頻度

表6 数量化分析に用いた説明変数とカテゴリー分類

		カテゴリー					
		1	2	3	4	5	6
説明変数	駅からの距離	0~200m	201~400m	401~600m	601~800m	801~1000m	1001m~
	大学キャンパスからの距離	0~200m	201~400m	401~600m	601~800m	801~1000m	1001m~
	商業施設数	0棟	1~5棟	6~10棟	11~15棟	16~20棟	21棟~
	住宅数	0棟	1~10棟	11~20棟	21~30棟	31~40棟	40棟~
	低層共同住宅数	0棟	1~2棟	3~4棟	5~6棟	7~8棟	9棟~
	中層共同住宅数	0棟	1~2棟	3~4棟	5~6棟	7棟~	
	高層共同住宅数	0棟	1~2棟	3~4棟	5~6棟	7棟~	

を採用した。第Ⅰ軸は「街区の建物数」(正方向で商業、住宅、共同住宅数大)、第Ⅱ軸は「街区の利便性」(正方向で駅からの距離、商業施設数、共同住宅数大) 第Ⅲ軸は「大学の影響力」(正方向でキャンパスから距離近、住宅数大) と解釈した。

4.3 学生居住数の多い街区の類型化

数量化Ⅲ類分析で得られたサンプルスコアをもとにクラスター分析(ユークリッド距離、ward法)を行い5つのグループを得た。グループ1は、キャンパスから400m以内、住宅は1~10棟、中低層共同住宅が1~4棟の範囲のカテゴリー割合が高く、「キャンパスに近く、住宅と中低層共同住宅が混在する街区」といえる。グループ2は、キャンパスから600m以内、商業施設、住宅、共同住宅、特に高層共同住宅の棟数が多いカテゴリーの割合が高いことから「キャンパスから少し離れた建物の種類、数ともに多い街区」といえる。グループ3は、キャンパスから201~600m、商業施設、住宅数、低層共同住宅の棟数が多いカテゴリーの割合が高いことから、「駅に近い、商業施設、住宅、共同住宅が混在する街区」といえる。グループ4は、駅、キャンパスどちらからも距離が800m以上、商業施設、住宅の棟数が少ないカテゴリー、低層共同住宅の棟数が多いカテゴリーの割合が高いことから「駅、キャンパスから離れた低層共同住宅の多い街区」といえる。グループ5は、どの建物棟数も0棟のカテゴリーの割合が高いことから「駅、キャンパスから離れた建物の種類が混在しない街区」であるといえる(図10)。グループ2,4は1街区あたりの居住数が多く学生の集まりやすい街区といえるが、グループ4は女子学生の1街区あたりの居住数が他のグループに比べて極端に少なく、男子学生が集中する街区である。グループ1,3,5は居住数、男女割合ともに似た傾向であった(表7)。

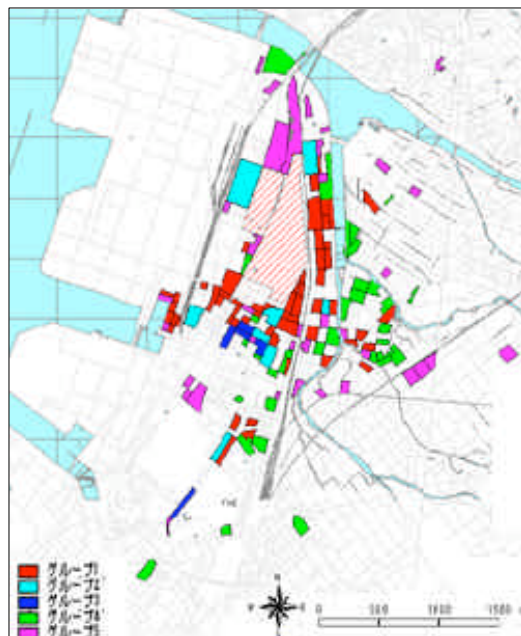


図10 箱崎キャンパス周辺の各街区グループ

5. まとめ

- (1) キャンパスの境界からの距離と居住数の関係として、100m~200mの範囲に居住数のピークが存在し、女子学生は100~200mから徐々に減少していくのに対し、男子学生は100~200mより遠い距離帯にも学生数の多いものが存在するという傾向を把握した。
- (2) 帰宅が夜遅くなる学生の半数以上がコンビニエンスストア、飲食店をほぼ毎日利用するなど学生の生活とキャンパス周辺の施設利用の関係を把握した。
- (3) 学生の多く住む街区について、街区のデータを変量とした数量化Ⅲ類分析を行い、「キャンパスに近く、住宅と中低層共同住宅が混在する街区」、「キャンパスから少し離れた建物の種類、数ともに多い街区」、「駅に近い、商業施設住宅、低層共同住宅が混在する街区」、「駅、キャンパスから離れた低層共同住宅の多い街区」、「駅、キャンパスから離れた建物の種類が混在しない街区」の5つの典型的な街区タイプを得た。

表7 各グループごとの学生居住数

	group1	group2	group3	group4	group5	合計
街区数	68	12	8	55	64	207
男子学生数	933	252	112	1140	839	3276
女子学生数	355	93	46	213	337	1044
各グループの居住割合 (男子学生)	28.5%	7.7%	3.4%	34.8%	25.6%	100.0%
各グループの居住割合 (女子学生)	34.0%	8.9%	4.4%	20.4%	32.3%	100.0%
1街区あたり学生数	18.94	28.75	19.75	24.60	18.38	20.87
1街区あたり男子学生数	13.72	21.00	14.00	20.73	13.11	15.83
1街区あたり女子学生数	5.22	7.75	5.75	3.87	5.27	5.04